

神経筋難病病棟に勤務する看護師が体験した 患者家族との関わりにおける実態調査

小原 美穂^{#1} 岩熊 茉衣^{#1} 尾方 福江^{#1} 北岡 千秋^{#1}

#1 独立行政法人 国立病院機構 徳島病院 看護部 776-8585 徳島県吉野川市鴨島町敷地 1354 番地

受付 2020.3.9 受理 2020.3.13 出版受託 2021.3.10

要旨

神経筋難病病棟に勤務する看護師 23 名を対象に、患者家族との関わりの実態を明らかにする事を目的にアンケート調査を行った。得られた回答は単純集計及びカテゴリー化し分析した。その結果、看護師は「日常生活援助」において家族から喜ばれる体験と、対応困難と感じる体験をしている事が分かった。また家族への援助に必要と考える事は「家族とのコミュニケーション」「信頼関係を築く」「患者家族の思いを傾聴し援助する」「患者にとっての理解者である」の 4 つのカテゴリーが抽出された。神経筋難病疾患のため意思疎通が困難な患者にとって、家族は患者の代弁者であると同時に長期療養生活を支える存在であると考えられる。その為、病棟看護師は家族との関わりの中でコミュニケーションを積極的に行い、信頼関係を築く事が必要であると感じていた。本研究において、看護師は日常生活援助場面での家族との関わりが多く、家族を重要な存在と捉えている事が明らかになった。

キーワード: 神経筋難病 患者家族 信頼関係 コミュニケーション

はじめに

A 病棟においては、ほぼ毎日面会に来られている家族が多く、患者の配偶者や両親がほとんどを占めている。長期の療養生活を支える上で家族の役割は重要であり、患者の精神的な支えとなっていると考えられる。病棟看護師は長期にわたり患者だけでなく家族と関わる機会も多くなる。家族によっては経験年数が浅い看護師やチームが変わって間もない看護師にケアを任せる事への不安から患者のケアを拒否される体験や、根気よく家族と関わる事で家族からも徐々に受け入れられ、褒められ、喜ばれる等、病棟看護師が家族と関わる中で体験は様々である。

そこで神経筋難病病棟に勤務する看護師を対象とし、患者家族との関わりにおける看護師の体験や、家族をどのように捉えているのかについてアンケート調査を行ったので結果を報告する。

対象と方法

対象者は、A 病棟での神経筋難病病棟経験年数 2 年目以上の看護師 35 名。対象者に研究の目的と方法を記載した文書と独自に作成したアンケート用紙を配布した。無記名自記式質問法とし、2 週間留め置き法で所定の回収箱に回収した。アンケート内容は、対象者の属性、体験、家族と患者の関係性、対応の項目を選択式とし、家族の反

応、家族に対し看護師がどう思ったか、体験を通して看護に生かしている事と家族の反応の変化、患者家族と関わる中でその援助の為に必要だと考える事は何か、家族をどのように捉えているか、の項目を自由記載とした。収集した回答のうち選択肢のある項目に関して単純集計を行った。また記述した回答に関してはカテゴリーに分類し、家族との関わりの実態を分析した。

倫理的配慮

対象者には研究の目的と方法、本研究で使用した情報は研究以外の目的では使用せず、アンケート内容に個人が特定できる情報が含まれていた場合はその情報を暗号化し、鍵のかかるロッカーへ厳重に保管することを文書で説明した。また本研究への参加は対象者の自由意志とし、アンケート記入後、回収箱への投函をもって同意したものとした。又この研究は B 病棟倫理委員会の承認(番号 31-9)を得た。

結果

病棟に勤務する病棟看護師 35 名中 31 名(新人看護師・病休者を除く)にアンケート配布し、23 名のアンケートを回収した。(回収率 74.2%) 病棟看護師が患者家族との関わりの中で体験した場面において、「日常生活援助」は困った場面で

18人(78.3%)、その他の場面で15人(65.2%)となった。又嬉しい体験では「患者家族からの言葉かけ」が11人(47.8%)という結果となった(図1)。

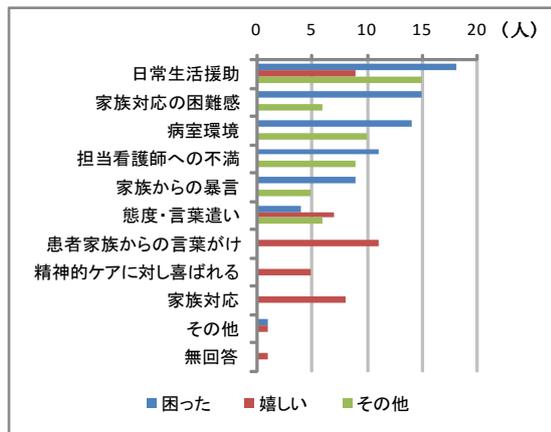


図1 病棟看護師が体験した場面(困った・嬉しい・その他)

患者との関係性では、「両親」が最も多く、次いで「配偶者」が多かった(図2)。

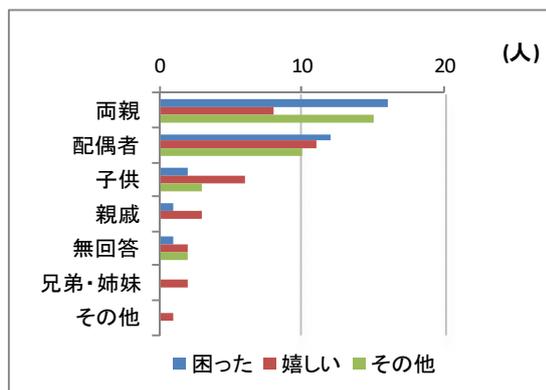


図2 患者にとっての家族の関係性

体験時の対応では、「日々のリーダーに報告・相談する」が困った体験で14人(60.9%)、その他の体験で16人(69.6%)、嬉しい体験では「何もしない」が13人(56.5%)となった(図3)。神経筋難病病棟における患者家族との関わりの中で援助に必要だと考える事に関しては【家族とのコミュニケーション】【信頼関係を築く】【患者家族の思いを傾聴し援助する】【家族への事前説明と状況に応じた対応】の4つのカテゴリーが抽出された(表1)。また、神経筋難病病棟の患者の家族と関わる中で家族をどのように捉えているかという質問に対し【患者にとっての理解者】【患者の支えであり一部】【教育・ケアの対象】【患者への思いが強い】の4つのカテゴリーが抽出された(表2)。

考察

看護師が体験した患者家族との関わりは「日常

生活援助」が最も多かった。A病棟は神経筋難病病棟であり、体動困難な患者に対しオムツ交換や体位調整、食事介助等の日常生活援助が必要である。家族は日常生活援助にも進んで参加しており、その中で患者に関しての要望が多くなるのではないかと考える。また、「患者家族と関わる中で援助の為に必要だと考える事は何か」という質問に対し4つのカテゴリーが抽出され、最も多い回答は【家族とのコミュニケーション】であり、次が【患者家族の思いを傾聴し援助する】【信頼関係を築く】であった。コミュニケーションについて野嶋ら¹⁾は「患者の看護に比べ、家族を看護することは難しい。家族の看護をするためには、より高度なアセスメント能力と共に、コミュニケーション能力が求められる」と述べている。神経筋難病は症状の進行から言語機能や嚥下機能が低下し、気管切開により患者との意思疎通が困難となる場合が多い。そのような状況の中で、家族は患者の事を理解している代弁者として重要な役割を担っている。A病棟において面会に来る家族で一番多くを占めるのは「両親」であり、家族は患者にとって大切な人であると同時に長期に渡り患者を懸命に支えてきた尊重すべき存在であるという認識が看護を行う上で重要である。家族を理解する為には家族の背景の理解や思いの傾聴が重要となり、その為病棟看護師はコミュニケーションを積極的に行っていると考えられる。その結果、【家族とのコミュニケーション】と【患者家族の思いを傾聴し援助する】事が必要と感じたのではないかと考える。そして、神経筋難病病棟において家族は【患者にとっての理解者】で【患者の支えであり一部】と言った捉え方ができ、関わりを深めた結果「家族からの言葉かけ」等の嬉しい体験にも結び付き【信頼関係を築く】事が援助に必要と感じたと考える。しかし、同時に家族は患者への思いが強いあまり欲求が強く対応が困難な場合もあり【教育・ケアの対象】と捉えており【家族への事前説明と状況に応じた対応】が必要であるという意見もあった。病棟看護師は出来る限り家族の希望を聞き、日々のリーダーにも相談しカンファレンスを実施しケアを行っているが、全ての要望を聞き入れる事は難しい現状がある。その中でも、家族が患者にとって大切な存在である事を忘れず、積極的に関わり続ける事は今後の看護を行う中で重要であると考えられる。また、今回の結果では病棟看護師は嬉しい体験をした際は「何もしない」という回答が多く見られていた。病棟でのカンファレンスにおいては患者家族の要望や対応に関しての議題が取り上げられる事はあっても、看護師の成功体験やその時の対応をチーム間で共有する事が少ないのではないかと考えられる。中納ら²⁾によると「患者との関わりにおける主観的成功体験は、看護師としての自

表1 神経筋難病病棟における患者家族と関わる中で、その援助の為に必要だと考える事

カテゴリー	回答	N=23
家族とのコミュニケーション	患者家族とのコミュニケーション	
	患者やその家族の希望や訴えを聞いたり、日々のコミュニケーションの中でも笑顔で関わるよう努めている	
	患者の看護は大事であるが、難病は家族も高齢になってきている為コミュニケーションや援助してほしい事など家族に聞きながら関わっていく	
信頼関係を築く	信頼関係が大事、信頼を得る言動	
患者家族の思いを傾聴し援助する	患者に対し尊敬や愛情を持って接すること	
	患者・家人の希望を聞き、できるだけその通り援助したい	
	家族看護、精神的なケア、共に治療継続していく	
家族への事前説明と状況に応じた対応	傾聴し、少しでも相手の立場から物事を考えられるようにする	
	無理な事もあるしその援助が必要ない事もある。必要だとすればマンパワーがいる。	
	患者家族の不安感を軽減する為、事前説明は必要	
	患者家族の訴えがスタッフと共有できる	
	平常心、状況によって援助を変更する適応する事 観察	

表2 神経筋難病病棟の患者の家族と関わる中で家族をどのように捉えているか

カテゴリー	回答	N=23
患者にとっての理解者	自分の家族を第一に考えている人	
	患者にとっての一番の理解者、代弁者	
患者の支えであり一部	患者の支えとして重要	
	患者にとってかけがえのない大切な家族でありリラックスできる	
	患者にとって必要な存在	
患者への思いが強い	患者を大事に思っているが過剰	
	患者以上の対応を求められる	
	心強い存在だが、要求が多い	
	愛情が強い	
教育・ケアの対象	家族への教育が大事だが、そこまでたどりつけていない	
	患者と同様ケアが必要	
	ケアチームの一員	
	第二の患者、でもあくまでも家族	

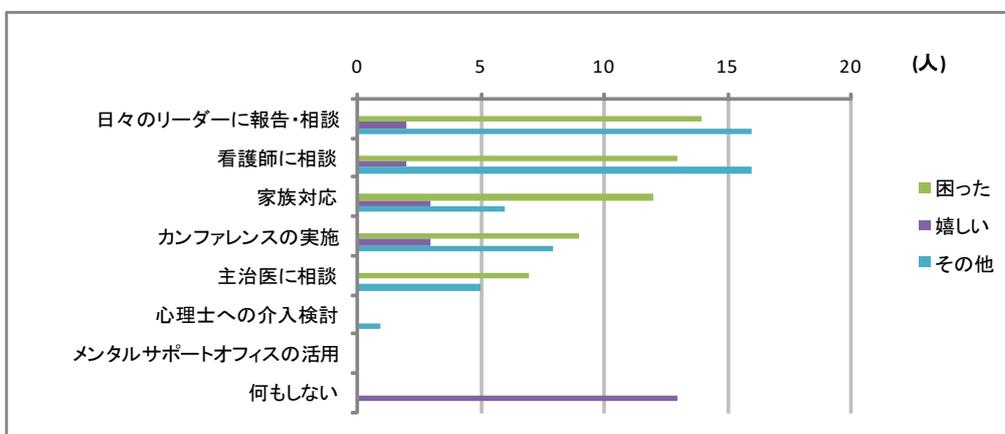


図3 体験時の家族への対応(複数回答可)

文献

信や成長につながる重要な体験である」と述べており、看護師自身の成長や自己の行動を振り返りその後の看護に繋げていく上で重要であると考えられる為、チーム全体で共有できるようにしていく必要があると考える。

- 1) 野嶋佐由美他：家族に向き合う看護師のジグマとパートナーシップ形成. 日本看護協会出版 家族看護選書, 2012;6:126
- 2) 中納美智保他：患者との関わりにおいて新卒看護師が考える主観的成功体験の内容と特徴. 日看護会誌, 2007;10(2):48-57